

始



蘭山高井先生著

# 農家調實記 三編

特279  
264

此書は男女婚姻の式事半総括然中身の性情指掌た勢の手  
帳としてト支帳の様やうある。松葉屋松風の用宣等、ま狀  
の手帳代に於てえの内に貯蓄多額耳。是蓋是蓋是蓋  
倍石の如きより四品の利口を出一算助佐作木作く御計る多  
とある。考を以て筆をもじ江戸書物問屋和泉屋金右衛門

農家調實記 三編 同様

- 民家の手又面積と割合より
- 常備自保邊方折方 ○支拂金と仕方 ○熨斗の包方
- 相生お越の手帳
- 精耕の式手記 ○耕飼同様書手帳
- 精耕之手帳の様
- 土用十之九の説
- 湖の裏廻りの出入手帳
- 席小出さる因文
- 來年室の主事よびの月室主へき大概と云
- 農家用字 深久 聞也
- 書狀手紙の如何

○主人嫂へ文通○伯叔父兄妹へ文通○同妻へ文通  
○貯貯一目又へ文通○子ト妻へ文通  
○日用お湯割ゑへ○十あれ小の手帳替の末お湯割計量  
○足利代納玉算○全石の見事○あらざんの八算見一  
○世人の言ふ開年事○世人考を奉お湯割はる湯のえ事  
○世人考そ八算除家はゆ○周見一除家はゆ  
○世人考そ墨の付し○世人かに時に角と解かる數枚  
○十石をもと毎月の利月の割年利割の割附  
○六千をもと仕替品と○世人より口糧割付

### 農家調査記三編

東武 高井伴寛翁編

○民ハ國の本又百姓と別する事  
尚書といふへは聖主賢王天下圖志と居て人姿後の禮  
がりうごく事みて五經の内の書經也。之の編ゆる民以  
大切小治へまとと丁寧示す。今世教の所傳ふ。民、の  
本本固れ、圓やドリもあり。貴君、民の様と已が狀  
トモ。憂ばれぬ。どう憂じ。みゆどく互愛の神祇施ゆ

也く民も亦父母の心しはかとなら。本固く邦安く治。後世  
わゆく君ハ惟安じる者く民とおきむじに無用ひと有司  
の心を経せ賦税とま。民苦めどもからず。民いまば賤。  
至而か立てへ奉向よ教よのを。内には偽ても收納は減  
せんとして。終は仇敵の心成らむ。玉川本源より國れ  
やをうごく。終は失ひあはせもと。和漢  
の書小於然たり。墨書の王事ふ君、民は治るる無常  
民、君と兵と力と勞す。能勞もるとの、人を養き。

力ば勞もりぬ。人よ治りくとはしそへなま。人よ養ひ  
下ばかうじる人。下情かま。衆民くまくんすてに  
心急と勞。治道と厚く丹識もぐ。且百姓とく居難と  
是とく小足ざくん百姓とくん、居難とくろひとくと  
聖經ハ忘るま。心りぬ。も去ふ民として人よ御さる  
らき者ハ唯農業一二昧也。君の食の虛一くと  
かよ耕耘努力して庶も。妻子の慈母は恭ひとく  
居候うてあるまド。如ひそとくそのかく日を紀よ

百姓の支寧はかうんまうと前也。金狼煙を、机く食ふ  
べからん。家の第一ハ穀あり。主穀、百姓の骨おぞびり  
出も。是ゆへふたりと制せらる。臣民の因よ農人種乳業  
すくわくいざまゐりのハ如也。主君を遠きにば。勤うる  
あくも目く郊野ゆゆ。山あは風未眼よ別。すうり涌  
ゆき全浪波え。年貢ハ取差うアハキ。云ても因實  
やかく。化社の十を知りぬといふ述もて。云猶も脚乃  
もの。能を力減當るの一車もありて。かく云々方也。  
それがよ是ぢ農の職をすり。力減劣もば肉湯  
さんとて。高れま似矣。是不和色たる美絃絃  
共一。俳諧狂歌など小傾きて。おお職をハ次第玉  
隠くぬゆくゆく事とも不知焉もひま試顔も  
主君を挾りたる産業と歎息もあん

○ 捨烟と武昌

瓦煙呑も媒波ゆく双方のあまづけ。幸。樂達の  
上総納とつう。けむよう双方聲と聲の名と知り

合ひ口の法あり。事でわが中は内緒、機密  
あり。取締納の手は、も限よ事ト。多かあれども。  
此因縁の港々、ば知れべ。農ふた豪畜のあら  
もあき、あら小船人より是とも極意の下すも  
く、ハシ達作の仕事、うそへうれ、五分ともしれ。  
お、上は身もお世も、其のゆゑ、えめうちも豊  
國源紙を二枚多く、又お代り多く、其の摺合  
小書てよ。

常ハ代みてあらハ。常代下の如き金の面にて總べて。  
常代みて、二枚多く、其の紙とニテよ  
お様のうつ向りにして、おのづ洋をうふ  
豊國源も金みの因縁も、おううけも、  
お色、紙と対をす。

う事期  
あ用女  
あん版  
常  
布商政局  
以上

名

萬金堂

目

名

右の二枚まゝ、毛く  
あひあままで

名

目

萬金堂  
名  
件  
件

金子の因縁と申す。左の方ハ、手でくわへて、おおへ  
め。お通りよか。一もいわれぬの處等もおおへ

あへく。あへたとおつておへ。うきの  
因縁、小はとあへておれ。ほんと、あへも小はとも

おへじ因縁と白木の因縁、庵のせとへとのへは主。事道  
あへば、こまいくての紙を包も。お門と緑切ふ。白く庵し。  
紙あへせられは、もうすぐ。左木二枚、充にして包じ。是も  
嘉よ少せ。長樂中、前より晴べ。難は算こと遣され。今日

左辰より付藤井と結納とをす。一に上者を送る義理。左  
連さんもさへ不禮法な之後の事か。其の後、あへて書  
いよ書添へ。達する方みて、因縁の事と堅りひま。

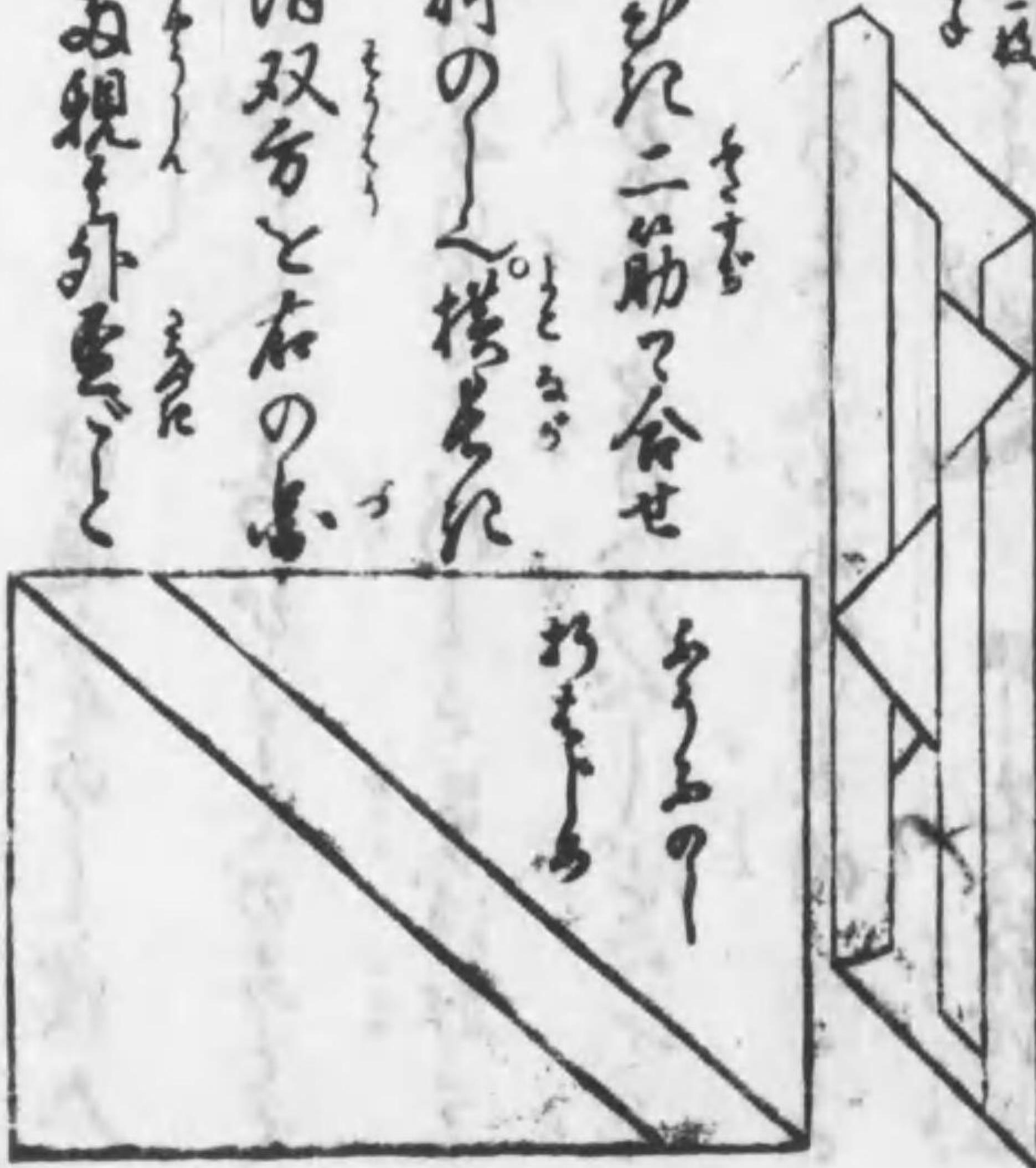
一右に通歲久安國も段ほ納はせ。まへる事と、海をへ  
は船すの間の船もかどの祠と忌怪の道具と達う時、草創城と  
葉籠と船のふねと一あせて、徳あきと曰ふ。く清え去る  
唯ふと達り書付の通文書左に通牒。お通す。とお聞日正  
名あはれ記。後う移の時里被の時ともお問合せ付べ

○支拂画のまゝに座付三方よ廻斗次よほへて上方ふ玉蓋  
シ被ります向ふ昆布摘要より次よ桃子花子砂入、武人、  
一色、どか、相生の世活とある。婦人着事して重の三方は絹の  
さへふ展へるとの盡と見て廻と。故來てつく。一絹、けで在今  
き人の跡あて廻ふふ廻はくまへ廻く。を廻すと又一絹、け。  
しむ男は墨淡あけく。二絹のじとあふてし。三墨淡下へ廻  
中の主とおて二絹若主へ主附。跡人合ひもあて廻のまゝ。年々廻  
主とえて廻。二絹のまゝ。主廻えて又やへ口。大かう  
男是とおて二絹のじと。狀の如く。重は下へ口のまゝ。しめ  
重、元のどくうと。你もと。支拂えぬ。アニ度若主へ二九絹  
とりく。又酒のよ成くと。砂入桃子花子沙引。主沙引。而度  
伏起て退く。は写跡人のとまゝ。ゆうべうと。よこぎり。ぬ  
ゆうじきりと。亦汝。女の方ふ計居て世様とまじ重はれも無も  
そばからか。九絹が被毛。まへば。玄黒の重と用毛。二絹

の事か。さうもひとも、怪体と猿を並べて之  
を観類の至りほじまふ。ひきかくに写されて  
いたる。もとより、小瀧派の事なり。かく  
いへば、文句を用ひ、見合べたり。利便か否あ  
る。もとより、先づ利便か否あ。酒杯出で  
て、酒宴ふ。乃ふ難處。腰贋の如也。是れも想  
ひ。かく見よ。ひ丈跡の者、退びて、床敷よ  
り。宣客も、かくもゆくましゆく。

質素な用意で御座り  
お通おへば長のへば  
結切ぢまとりくも、また  
様子

まちのまち。  
二筋丸と附双方と右のま  
ちくわぐわがま  
△あんこ外まち



の蟹半

成二三八六四

ば通をその下端入

色ハ

さくわらま人のあくく

あき、紙とよとからうのま。波の水のよとくねま。黒はわる  
通り。うちれ。紙のよとくねまのよと著へおぐ。またあく

りのむまじよ。あまよ。あまよ。あまよ。あまよ。あまよ。

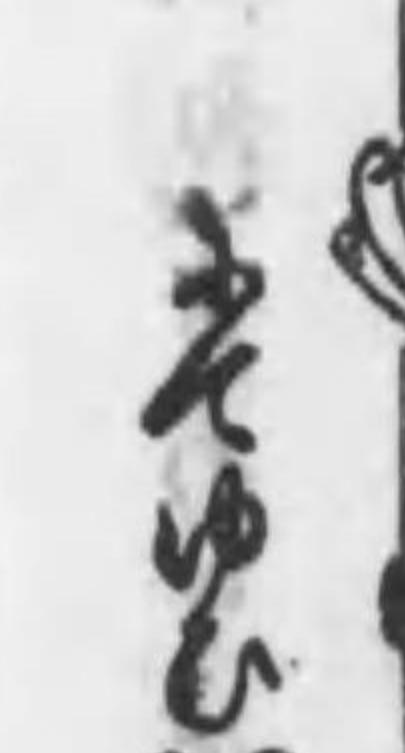
くまじと主縁によよ

よし表、石事ももよ

のよとくねま

のよとくねま

くま、あま縁あり。あまゆし切しのよとくねま



○贈烟歎くニ首よ。腰と河答へ入くをうのとけ後回  
おきよ。着手一通手て河達也よ。と。首子の腰と名  
づく。着う千指の類と説る。腰一て千指計と多う。す  
り。おがは結物よ。千指をどば延。ひが。ト。類と  
書。せぬ方よ。先のあ内へ。後の傳云。多のあ内。の傳云  
玉とも。本支のまへ去。ほりてよ。しまえ人を表向を表せ  
書。あよ。家内のは云かれたと。筆と丸経後も。多が左の  
かねふくよ。狀も外を因士。贈烟歎里す。も。墨と墨よ。そ

生着と達り往後と連す。け承より人を去とせざる所  
とす。又外肩下に著す。正体半切身よりまへ。是故  
と人書と云。いよしげとて、法事と申る。佛事やも

其の事也。とあり

○男女縁と定じふ。男の性よりて。お生相対の私惡  
と謂ふ。とちうの風俗よりて。生対・自他の理と云者  
也。河圖洛書の教より知る。震、巽、本性よりて女陰性  
也。金剛本來を女の全男の本と切例せばと対する。

云。後三十甲子と云ひよ記あるて。云。男の本と女の火  
の本の本と女の全。女の本の火。又平の法事下に著され。か。  
男松柏の本性からて。女渦牛の全。又金漏の全。かくは切  
合す。ねきを射する。よ限えく。け頼ハ理ハ射されども。  
物かくはれども。云刻れども。か。法事と云ふ。左との  
云壁の本性ゆく。大渦の本性と刻れども。壁うんねりも  
又施。云生金と云。壁の本性を渦の全性とまも。か。  
遠く。今生れても。金漏の全性が。右流のお性筋助をも

たま。唯のもの生刻と人のはよむる。家の生刻も。ま  
味かく美かう。あとも事も全を刻めば。本の用と  
をも。金を火ふ刻せば、金の用ひを。じは推時を  
男の女と刻も。すり男と刻も。大増べ。是も  
細説、手書て。筆落書示素沙と著して。書林玉巖堂  
子属。手書。金の刊行わん

(摘頭ふと千葉の性と様

九種のふわと様とねあらゆる。人の風ふうての本版



子午寅申辰戌

丑未卯酉巳亥

の秋月人情紀述

ひつからと空ら  
中持よとひじく  
黒づきのゆじも

左の方へ工た、トヤツものえつものと申ひひふ事ある  
て。二便づ取合と便中ゆびもまつものえつものとなり。  
小指は二便からし。右は三づのえ。左は三づのと。左半乃指  
皆は指ゆ。右便で右半の指も。取合一千九百十千の  
度不は通きらず。骨へ大指のさくらふより事また  
十二支とよまと。是も半の指皆とよまと。子丑、との便實  
や、中、便實也。下の便。牛、羊、上の便。牛、馬。中、馬  
牛の便もトヨモ。成吉思汗の便もトヨモ。十二より  
と約べ一

大指 海と山の合よ。又深きと。杭萬年の大毛筆の毛を  
人指 実のあ天河。又うど。山の毛と鹿との毛も。又  
中指 雷と天の火。油山と有り。森と平地の木、木の毛を  
書寫 簪とぬ松柏。松柏白。又ふりせの毛も。又毛を  
季指 茶と柳。全滿つ毛。又茶の毛と柳の毛も。又毛の毛を

ひみ宵の秋。拂ふとくちうい夢もじ。ぬ丁丑のうまれかくす。  
人拂のあくせ、どめゆひよてし。一匁のあくせあへ人拂の一匁  
國。拂ふ。合せく。先のあくせ。壬午を。手拂のを。  
キハ一匁用のわゆ。左は玉拂ふ。合せく。柳の本性と知。  
まべて。空の拂ふと。匁。拂も。空の性と。手拂の  
拂ふ。記りて。え。△えとい。先拂ふ。十千の拂名を。甲乙も  
本の先拂の。手。毛ゆへ。拂ふ。えと。大のえと。すと  
え。十二支と。組合せられ。十二のえとの。あ。能えとい  
と。計ハ十千よ。限。し。予母。えと。あ。甲子と。組合  
て。千支の。名。あ。ハ。十。一。の。拂名を。うりて。ち。千。幹。ふ。て。本  
のみき。支。拂。ふ。て。本。より。あ。る。拂。ふ。暗。て。千支の。字。拂。ふ。

辛未

寅申

辰戌

未ひと。未モ

甲乙丙丁戊己庚辛壬癸  
海中金。沙石金。大溪水。井泉水。覆燈火。山頭火。山通。皆。三。の。木  
澗下水。天河水。爐中火。山下火。沙中土。屋上土。山通。皆。三。の。木  
霹靂火。天上火。城頭火。大驛上。大林木。平地木。山通。皆。三。の。木  
壁上土。路上土。松柏木。石榴木。白臘金。銳劍金。山通。皆。三。の。木

卷十

乘柘木

楊柳木 ヤウリウ

金言錄

金峰劍

長流水

人海水

通鑑

蘇海集とすまふのゆふ海事の全壁のととを一いと  
直しく洗り、先とまよひぬると一いひん。門へかはれ  
の水とし事むけづるよりも遙くもろう。ものわざのわざ  
むやの火と東との火とし。乍ら、ありとどき事まじらて森靈  
ひよと竈の火と大詫の火とが次のをとひ。紹とアヒトモアヒ  
たまてを盡する。紋門の金と劍の金とくに紋の事とて多美へ  
きる。用ひの別來たる者、全篇の金はほの金と。銀等の  
金が何の金とひ通達て、千支配萬別を運営の理。うな



文で感ぢど辰巳、陽起つゝ夏紀のり龍蛇、乾も成  
亥、陰斂て坤と靜くちもと物と塵をへし。猪也ふ  
つぐゆへ一と紀せり。以上十二生肖属の運休用もる小足勢

○同十二運のうちゆ

大指 長沐浴臨帝袁病死墓絕胎養

人指 中指 翁  
中指 ぬねじやもううたつてひまじがるどうの本性をう  
とらうたつむまじどるとうやじなれし火性あり  
翁 言ふうやおねじよらうたつむまじはあと火性

季指

もむまひ下さるどもねねじらうたつ、今之運と齊

右、通款と覺、火性の正の年、火の運とかゆ、中指火性。

し、火既やと多く、十二運の大指みて十二運の終より合

まと、養の運と火性みて成の年とは、壬午指火と水性と

成、火既めとくるい、火既めと大指の二既へと萬き、官の運と

初の運十二既か十二支と指一本づふ十二支み合せあれ。の後

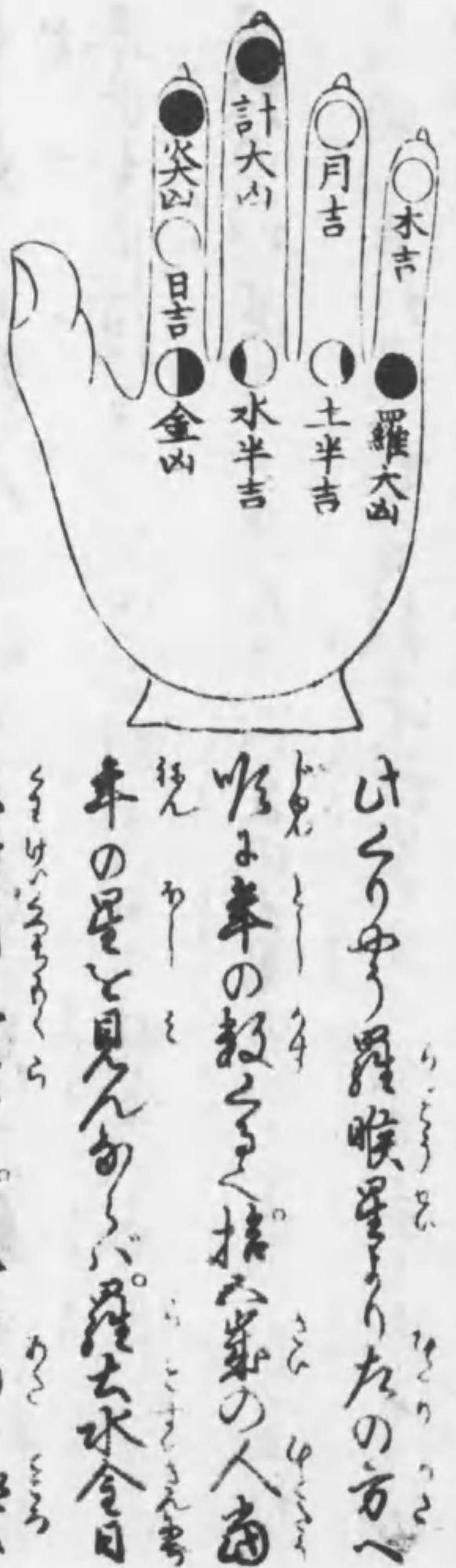
あると見て運小口合せ。計之數の十二支、皆ふ火也。人指

亥、火既。次、寅の事。又、寅の事。寅の七日申より。季指も

申の十日巳より始る。小指のじまうり様小木寅申巳と  
覚え、漱之又様小木大土令と覚ゆべし。がく覚え、うらや  
え及ばれ大性を牛とば。中指もて寅うら卯辰巳牛と  
写因ゆへ陽の運本性を牛へ入うらをまうれんが月く。  
大指ゆへ亥死の運と呼

○ 四九曜星持ゆ

奉じゆる星を吉凶と呼へ。吉は星鑑をして悪星を除  
きとせ。宿もいづるは陰陽が修業者おの事あり。儒學  
天學が絶てかと。九曜は木曜。火曜。金曜。水曜。星。計都。星。  
日曜。月曜。是故に。宿と計と火と二つ大堂にて。陰の象とよびと



火曜星ふて大凶星。火氣をもひむゆ。自れ、吉惡は大  
凶。土と冰、木と金曜星、凶也。天學がふ、羅喉計都ハ自

けうす。羅喉星よりの方へ  
終よ。本の教とて持たぬ人のあ  
るやう  
本の星と見んやう。羅太水金日  
大計日木星と。すよ。よ。あ。こ。起  
火

道文の名曰日本大土食冰の七曜、曆の日をのそり。

○土用十八十九の説

至<sup>アリ</sup>年<sup>アリ</sup>の日數<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>よ割<sup>アリ</sup>て、一つ<sup>アリ</sup>春<sup>アリ</sup>のも、一つ<sup>アリ</sup>夏<sup>アリ</sup>、一つ<sup>アリ</sup>秋<sup>アリ</sup>、  
冬<sup>アリ</sup>のもとし<sup>アリ</sup>、一つ<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>よ割<sup>アリ</sup>。十八日二時<sup>アリ</sup>金<sup>アリ</sup>、春<sup>アリ</sup>夏<sup>アリ</sup>秋<sup>アリ</sup>、  
日數<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>よ割<sup>アリ</sup>。たゞ<sup>アリ</sup>夏<sup>アリ</sup>の土用<sup>アリ</sup>の日<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>、<sup>アリ</sup>の立秋<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>  
一時<sup>アリ</sup>、立秋<sup>アリ</sup>、秋<sup>アリ</sup>の日數<sup>アリ</sup>を<sup>アリ</sup>、秋<sup>アリ</sup>の土用<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>、<sup>アリ</sup>の立秋<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>  
長立冬<sup>アリ</sup>を<sup>アリ</sup>、<sup>アリ</sup>の土用<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>、<sup>アリ</sup>の立秋<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>、<sup>アリ</sup>の立秋<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>、<sup>アリ</sup>の立秋<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>  
立冬<sup>アリ</sup>まで、僅<sup>アリ</sup>の宣<sup>アリ</sup>、一日<sup>アリ</sup>と<sup>アリ</sup>、十九日立冬<sup>アリ</sup>を<sup>アリ</sup>翌卯<sup>アリ</sup>のと<sup>アリ</sup>刻<sup>アリ</sup>時<sup>アリ</sup>、  
立九と云。暁子<sup>アリ</sup>入<sup>アリ</sup>、十八日立ち至翌卯<sup>アリ</sup>刻<sup>アリ</sup>時<sup>アリ</sup>、  
卯<sup>アリ</sup>ハと云去用<sup>アリ</sup>の日數<sup>アリ</sup>、<sup>アリ</sup>と定<sup>アリ</sup>り、<sup>アリ</sup>て入<sup>アリ</sup>の迄<sup>アリ</sup>、<sup>アリ</sup>て  
より始<sup>アリ</sup>ること<sup>アリ</sup>て、庚申<sup>アリ</sup>の日のを<sup>アリ</sup>、十八九の後<sup>アリ</sup>からと云、  
と非<sup>アリ</sup>説く。故に<sup>アリ</sup>我<sup>アリ</sup>者<sup>アリ</sup>候<sup>アリ</sup>のみ<sup>アリ</sup>、春<sup>アリ</sup>、夏<sup>アリ</sup>、秋<sup>アリ</sup>、冬<sup>アリ</sup>小配<sup>アリ</sup>、  
彼<sup>アリ</sup>の一宗は中央<sup>アリ</sup>の去<sup>アリ</sup>て去<sup>アリ</sup>旺<sup>アリ</sup>へ<sup>アリ</sup>も、我<sup>アリ</sup>も候<sup>アリ</sup>。候<sup>アリ</sup>も、  
冬<sup>アリ</sup>の前の事<sup>アリ</sup>、土旺<sup>アリ</sup>と云ふ事<sup>アリ</sup>、耕作<sup>アリ</sup>の時<sup>アリ</sup>去<sup>アリ</sup>、<sup>アリ</sup>つ  
うこと<sup>アリ</sup>かたの候<sup>アリ</sup>向<sup>アリ</sup>下<sup>アリ</sup>自然<sup>アリ</sup>の物理<sup>アリ</sup>、<sup>アリ</sup>の事<sup>アリ</sup>とも

早々二歳三歳

引合せ見立年

○年中日の出没金額長短

正月節

日出打八割内

日没雨初割余

日中

日出打七割餘

坐六時一分余

二月節

日出打割余

日没雨二割内

日中

日出打五割餘

夜六時六分内

三月節

日出打六割内

日没雨六割余

日中

日出打三割餘

夜六時

四月節

日出打七割内

日没雨八割内

日中

日出打七割餘

坐六時一分余

五月節

日出打八割内

日没雨九割内

日中

日出打八割餘

夜六時三分内

六月節

日出打九割内

日没雨一割内

日中

日出打九割餘

夜六時八分内

七月節

日出打九割内

日没雨八割内

日中

日出打九割餘

坐六時二分余

八月節

日出打九割内

日没雨八割内

日中

日出打九割餘

坐六時二分余

九月節

日出打九割内

日没雨八割内

日中

日出打九割餘

坐六時二分余

十月節

日出打九割内

日没雨八割内

日中

日出打九割餘

坐六時二分余

十一月節

日出打九割内

日没雨八割内

日中

日出打九割餘

坐六時二分余

十二月節

日出打九割内

日没雨八割内

日中

日出打九割餘

坐六時二分余

納沙の爲め虚月の出入再談

二篇小沙時のと並記せり、ひま大概用事の多きを云ふ事無。

主ふ、金銅と邦の正中ふのじより。月の平均はもろて割れる  
如きと。是も實は毎月銅の割合よりか。日と今日の  
主の割合時よりて遙ひ。月の正中も遙隔後既とて。平均は小  
さるときよどむと。平均して主より教十度十九分  
度の七と云が平均被之とて。江戸の達算かられ。潮汐時小  
於く主数は得て。而も主より。潮汐小  
高下を記す。記と大約小潮と云。主根用。乃は小  
潮より是

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天

正日 外年止

午一子

二日

午四子

三日

午五子

正統

人天





明和のひより又屢ふ出。又去用の當日と漫日減日と云ひ。古き屢ふ出。費用の日たゞてま後止ぬ人をあひ日取られ屢ふ出。長屢ふなづ通出づ。

甲子春ハ乙丑丙寅丙午丁卯己巳辛未甲戌乙亥

丁丑庚辰丙午壬寅戊子庚寅辛卯癸巳甲午

乙未己亥庚子春と秋壬寅癸卯癸卯丁未辛亥秋

丙辰戊午以と其の年中人を委す。一は前甲子年

春三月即く庚子の事と相り行く。主徳。一は春山

秋山とよどむと、また三月とをも外野物なり

總て方角因れの事体なり。一は支那か、或清

朝の先帝多製作の協紀譜言書と云ふ。八帙四千八卷

ありてをせり。本邦か、藍藍或い是處小泉氏の蔵櫻庵など有

○ 来年國の有事乎ひの御室主と大抵と云

高年の屢十一月の中冬との日教と云ふ。十八日との冬

かく。来年三月。十八日以後かく。室主二千九百の冬を

の日と減ト減て六日ある。来年三月のひ夏あり。六日

かく。七月小閏かく。室へ三年か一ツ。五年か二年半九軒よ  
七つまで足不足か。一七の浦まど。養教ふ足不足にて。  
唐高ちあらまども。居養教ふ。腹數はうちを也。  
主ぐく閏月か。中氣かく。本月の毎日望月の習目不沖  
氣も。閏の月す。小数まうりと。そのへ毎月の十一支大を  
主七つ用う望月の日かく。小数は六月用う望月の習  
かく。正月大考子の習目かく。年う二月の習目。正月  
初日甲子干。二月も甲の年。正月の習目。大考。正月習  
と十干違ば。正月小考。

○農家機具多外用字

紡車 織車 蘭の 東籠 糸巻 纓 緒 機 機杼 繼  
織脚 織複 緒 繢 繢 繢 繢 繢 繢 繢 繢 繢 繢  
蓑 組枕 蔊櫃 蓑被 袍 緒 緒 緒 緒 緒 緒 緒 緒  
樹縫軸 龍毛先傳の經 紡織 機場 機杼 東籠の又  
綾車 外機 袂子 笠 帽 築 築 築 築 築 築 築 築 築

絲織杭六八串の 梓接外經緯 平緯 冷金 素と織  
△織物と名く 檻原織 蘭緋 今等と云織物 方同紗  
芭蕉布 八藻布 八丈絣 櫻嶺織 紀情織 福建  
英東の 總緒 酒綿 檜葛刺綿 絲子 純子 呂達綿  
襪褐 兔褐 けあうき 編 編綿 繡紗 相二重 柳條 東丸  
秋父絹 緞子 緞子 素紬 今持綾 布 織綻 大紋緞子  
東絹 和金丹 韓織 暈本綿 銀緋 綉緋 銀洋布  
廣東絹 加冕旦 文紬 海鰐 紗緋 緞子 沖和綿 揭布

蟹著羅 羽山織 緞金 緞麻 朱漢麻 吉文布 茶布  
ゆく重さ 丹後弓 小城平 絹布 緞南初綿 李良綿  
斜衿 紗子 疙紗 疙脊綿 六絲 支那 紗綿 沢織  
よのうの 一糸 故織斗同 極用綿 壓中緞 葛布 駒内 大浣布

吉縫 異形綾 小金織 小絹平 云麻丸 善慶 異縫 嘴連  
さじけ こぶつの名 こぐらう こえのい ことう ことう ことう ことう ことう ことう ことう  
袖琥珀織 酒綿緒 帆夷綿 綉綿 向緑布 朝布毛 緞

元ト  
櫻糸 寒綱 南京 齊根島 又陽紫山 纏  
木綿 木綿 蘆枋綱 金絲織 仙毫車 素綱車 緣納車  
數萬重綿 岩櫻木綿 絹綸 芳絨綸 畫綸 繡綸  
圭綿 繡綸 脖綸 束綸 索綸 擦綸  
綬束 捩束 細綬 本綬 天蚕綸 唐云織  
千物 木綸地 木綸大及地 足地 切比  
表具 木金縫 竹尾町 亂糸の包 等身切 紙將糸  
室との部衣をもて、いも系多事あし、も多事裁毛、奉承用

暁綱  
の類も又際限をば著。機織アラシ  
日本ハナシも往古よりされど人皇十穴代ヒタチ御天皇の御時。  
其のまゝ機の道アラシノミに女巧と云ふてあり。是より

大ふむろくからし繡緋の通アラシノミ十代元正天皇の御時。  
吉綱ヨシハラ入唐してゆゑと傳へ本約小國ヒトヨリコクつて太角オカツ小縫取アラシノミ  
達らき一トヨリ精緻アラシノミ絶は縫取アラシノミかとのつまき成るべり  
△深名級アラシノミ絵緋アラシノミの事アラシノミもと有りしより不<sup>アラシ</sup>り。唐人用の  
物アラシノミ山持アラシノミ魚緋アラシノミ田代アラシノミ禁アラシノミ考アラシノミ衣アラシノミ龍アラシノミ也アラシノミ織アラシノミ約文

純父アラシノミ花田アラシノミ淳潔アラシノミ後アラシノミ山持アラシノミ英穀アラシノミ源アラシノミ考アラシノミ織アラシノミ葉アラシノミ  
英鷦アラシノミ葉アラシノミ晴線アラシノミ媚アラシノミ葉アラシノミ此布アラシノミ葉アラシノミ集葉アラシノミ薺葉アラシノミ藍海アラシノミ松葉アラシノミ  
垂圓アラシノミ一 蓮通アラシノミお侍唐葉アラシノミ英唐葉アラシノミ豆葉アラシノミ金雀葉アラシノミ蝶葉アラシノミ  
瓦葉アラシノミ輕粉葉アラシノミ紅鑲金葉アラシノミ鴉葉アラシノミ木賊葉アラシノミ小葉アラシノミ鑲葉アラシノミ  
鈍深纏アラシノミ纏アラシノミ康斑目結アラシノミ柳葉アラシノミ絛葉アラシノミ精相葉アラシノミ柏子葉アラシノミ樹葉アラシノミ  
秉褐アラシノミ黃度アラシノミ唐紺アラシノミ卵葉アラシノミ臘葉アラシノミ立涌アラシノミ蒼葉アラシノミ橡葉アラシノミ  
櫟葉アラシノミ之處アラシノミ黝アラシノミ灰アラシノミ灰アラシノミ南東深アラシノミ鳴海波アラシノミ紫アラシノミ村濃アラシノミ村甜アラシノミ  
彦材アラシノミ洞電アラシノミ簪金アラシノミ芒縞アラシノミ英襯アラシノミ也アラシノミ朽葉アラシノミ紅黑端アラシノミ

宋火宋柳 善事火 方料繫 山楂 肥蟹深揚火 宋火  
幕房 二藍道火 美勦 燈火 紅橘深 紅濃花火 蘆擗  
蘆油甜 萬深 淡蕙 今清 例 喜白火 淩綠 繩火 美瓊  
章蓋美 黃藤深 告素 牡丹 牡丹 友深深 蒲萄深 錦美  
碧 珠 翠 青 大漆灰 黑 正年深 正年 鮑蟹甜 例支搘 鏽鍛  
鵝鐵源紅 雀肉深 七寶繫 萬蒲草 纹文 檍皮火  
模榔子火 木蘭火 桃火 桃紅 蘭黃 緣黃 桃花火  
艾鳴毛地搘 本性 百入 文模 木蘭火 木濃 榕竹  
素海松茶 繡蕩 漆撞火 文柄乳粉 漆黃繡紋加駕紋  
西年紋 切付紋 上絛黑腰△衣裳公接 明織繡紋  
法被脰巾 斤同衣 不見 芳種 寶綉 端織 繢織 素綉  
摘絲 月絛 繁掛 褙裂 繩鎖被 卸子偏襯 繢縫  
布子 紫衣 紫子 繢帽子 蓋衣 被子 禪衿 暑衿  
惟玉肩衣 上不抱瓦 繁惡 敷帳 牀頭被 袤襯 素皮  
窟衣 脣襖 寢衣 袴惡 乃接 褙被 袪襯 素皮  
足袋 襪袖袜 襪口 惕裙襪襪 裳綻 繢綻 素皮

綵織 表裏 緩襦 產衣 襪 暖帶 幅 署文 蔽膝  
丸絆革 被 漢綾衣 表傷衣 古襪 右足 振袖 布紱 僵縫  
帛 緣紗 緣襦 緣鼻禪 端邊 不即急衣 異被 蔽衣  
疊張 衣文 紗 衣領 禪 暖巾 手蓋 緣 紗  
綿布 雜巾 紗 浴衣 緣革 育革 又襪 網紗 紗 紗 紗  
裝束 時被 淋衣 夹衣 俗の 宋衣 十袖 白襪 帚 滾布  
甲子施 緣襪 緣祫 草衣 領巾 牀人頭上 平絆 緣襪  
寶錦 白衣 緣 紗 帽子 緣佩 緣引 緣繫 緣

○書狀手稿之類

化圓の又通と書狀と云ふて文書と云。一筆契とされ  
御見事と書出とと陽化と云。年賃料計、素小改革事と云。  
手稿をも、口傳下納りと書出と。遂に、財物と、まわねえ様  
か後改革と書。手稿は、素小改め事と出てるは、文書と不  
の様いすへと達ひ今、主人がよ限ら難き又様の事。窮屈熱  
少き風もあり。唐も春向の外様の又通、互に丁寧と云  
ども主程に決計り失致かと云ふ事なしべ。降り来る

もねうると。書狀手紙の程合と左と右ととくべても、

まつゆゑ准じて上件下考すべし。

主人吉田一筆奉稿と候。義人、以舊紙奉稿と候。  
觀陽御室

近時ハ、ちる紙不善紙有奉來見候。ちる事多甚。

時候ハ、暖署之辰、御清暑を兼ねて拂菴御懶拂角  
紅遊事、度奉恐候。如常令暑着色日。

見巴、猶又時候、奉観事密附。且  
事為、無事と御清暑たる者一并奉進是推

物と掲る。仰承京は掛る事なし。且往後一并奉進是推

事遂可奉幸候。

書面ハ、右を既奉申と度以恩れめひ御清暑御奉納

後者との候思惟難矣。

近時

在る報奉申と改め承り度候。致易

義人

在る既奉申と度

近時

在る既奉申と度

致ふ書面、字法異なれども、清幅りお嘆の事甚。中の文照

ひの字少ても事多し。誰の事は書と去れ。誰へ是出かよ。  
そぐく候の字計も。手の字一引の端りか。あざれども。さひま  
書時。手の字を書時の宛名。主觀へ先の苗字か。誰様と  
書。じ方の名。細字小音字とも書。居判も小字ふ居も  
假付。奉人等。印。狀。書。墨も報も刷也。主筆也。主  
と書在と通かく。奥は石とある。五万の人時誰の安否  
と云次。松陰そ美。私事。不候。未安。かうと云。是がまよ  
書。伏見。京とあふ字の原因。何故。該書。義理。布。身出で

よ。書状。案。手書。用日の一引前へ。用日の後へ。出判。集  
あ。連名の出付。案人連付。と廣き。とて。筆者。の者。の文  
用日乃一引前へ。用日。の下。主人の判。主。出判。附。と。主  
の名。判。が。終。不。か。之。先。行。宛名。の。字。の。主。の。出。付。の。名。付  
書。も。出。付。の。と。書。り。も。筆。記。者。へ。行。か。主。梵文。額。も。以。人  
手。判。と。蓋。す。と。し。用。日。の。下。へ。名。付。連。名。付。と。主。か。之。  
書。人。教。と。り。主。年。号。用。日。と。主。か。之。又。出。付。の。封。用  
の。よ。う。や。り。も。と。よ。下。と。と。う。と。云。と。か。れ。と。と。よ。通。へ。と。用。下。

ま。封方小二事。先の事の切とく筆をも封方か  
ぬよりふとて。ひづるを封方して。先の事。切とく  
ひづる封方か。人觀へ、封の事とおき外、  
そはしもと二箇のどうりへ打り定ひ封の事へ附  
せ

千葉へ出でまし、大モロコシ  
切封の事

まことに切穂の如け  
皆の如くよやと云ふるの如  
其の如くも農事小用の如く等々。  
其の如くも農事小用の如く等々。  
其の如くも農事小用の如く等々。

とまよのくわい  
おもての字、うかがふとく  
用ひて行雲をす

時惟八  
春易失  
而後追  
悔無及  
事已成  
追悔空  
徒增憂  
愁而已

書簡　吉川源氏もあよせら通わくよ  
あそぶ　こ、せうと  
まくと　きーと、まんと  
宛名、序萬事小柳、善利。ひ方名、事名とまことはの依付  
あふゆる通わよ。との字じてよ

どくちいぬけいふせうじ  
一葉堂住山

此  
卷  
中  
所  
載  
之  
文  
字  
皆  
系  
我  
朝  
之  
先  
人  
所  
作  
其  
言  
旨  
意  
深  
邃  
而  
文  
字  
简  
洁  
其  
思  
想  
之  
深  
刻  
实  
为  
世  
间  
之  
珍  
品

物と錫八、何處不挂け、意在仕合す。以て打撃賞味仕合  
此八事の如く、さう、どうぞおもひの  
事と下りて、先

家名は、かくの萬事様と書く。伊佐根村、東久留米市相  
模の邊り故村也。國司姓久留米氏。源氏宗室也。

物 一筆絵物と云ふ。義は以て紙絵物と云ふ。  
陽化 送物 まれ絵物と云ふ。墨書きの紙絵物と云ふ。

時惟八 異著の筆法の如きの物を率安して紙絵物と云ふ。

見色八 宛文墨色の如きの如く、いはば墨絵と云ふ。  
摺繪 之に不備の如きの如く、いはば墨絵と云ふ。  
高麗 在の絵物と云ふが、其の絵物は小品性

物 通称在報の墨本と云ふ。

絵 在の絵物と云ふが、其の絵物は小品性

究底、絵と云ひ得人の中。送物の絵物と云ふ。送事書

因乃、送事書の利点をともとめて

子 一筆の如きの如く、義は紙絵物と云ふ。

高麗 摺繪の如きの如く、義は紙絵物と云ふ。

時惟八 異著の筆法の如きの物を率安して紙絵物と云ふ。

をぬ。

佐藤家は其の子を入へ

お給ふ。何より候下さらむ。

書簡書簡ハ

名の手迹手迹ハは珍重多き事

也

左の手迹手迹ハは珍重多き事

也

家名、役付、本小冊付、高不とおひ方名、名字まで書。  
但ト様がやとの方へ、じ方の落字とす。小名計書なり。

是様に如く、先に支通書を海より、以上の支隨書附て置く。

右前より舊校書の跡跡ハある。

左方より城下町場など都令國の如く、儒生学者者も至

て、勅學院の在學求と轉ゆるゝのであるべく清文事務

と云う。農家小供等々の風流の族も多々。往々其家

うちの又通えゆる方よ。おまけ方老ともあれ、それも。用の  
手本手本ハ、又墨文經の素讀ゆくも海と。言葉も書かずと  
思ふ。其の達せし處は、未だ大が知り難い程学て

毛利に見えた。湯河ふ端の家と牋が通溝。  
中庸としとし。音ようと覚るかを書く。僕を教る  
人を習ひ人も和付ぬと云ふ。元旦と旦又と似たるやうなれ  
ども其ハ一と因ともうん。且、一あく諸侯時候。終る事  
ある。上候下、候。中少イの。左右と公私と似たれども。  
よ、卿を下、卿楷書、左不美なり。右空と要はと似た  
どもと、望。夕とまづ。下、聖。月とまづ。珠玉玉人と、五十ハ  
玉是忌のお處ある。傳の通り。そぞうか、誰も書やども  
書。覺えきとも。松庭笑源より云ふ事似く仮字、遠て澄長調  
蝶も左の様。左が比較的字形で左が右と。己達  
せりと。左とも。字と云ひゆうて。主家とつけさせられ。左  
ハ事よ効く。左のみ。歎くにものあらじや。極富は藏す  
べ。清ハ七情反音圓。庚耕清韻の字少。喜ハ齒ようむ。  
平聲次清音。性ハ今小屬。冰性の人かど実名ふ。一。  
漢音ハせ。異音ハ。唐音ハ。今文那小唯処ツイ。

相是と清めかどのーと仰へ。せいの二字と又切へ。の一字  
ふつてまる。日本限のよみく。和例へきはし。又すじとくし。シハ冰  
かり。氷をあへ。青く又さはし。是冰の篇と青の旁とす。し又  
さよーとよます。いもれく又和例のきはしの二字。例のと  
かまく。孰若あて人の聲のよき。片づきより。風教万  
の文字。こ小さまくの理と見るべし。一字もけ。如何字  
よも。く覺らど字と知と云。徳も人經文選の素續左國史漢  
の今讀経の事也。心中に知る事あひし。若れより教方  
卷小眼とぞし。擬句の隣櫻の櫻ふむ。ナノは碎のさあ  
やうむ地むうだり

○日用考傷割

軍への玄末百俵。金十両。舟木羅俵二千石の傷割を  
賣。ひ代金と却か。百俵と金。其軍俵二千石。船木刻。水  
羅俵と二千石と支へ。羅俵と。金羅俵と。百石八丈  
二束。船百十丈へ六と。うけ銀六百セト二リと。又百十丈  
へ。百丈の該傷割と。却か。清考。本体の八軍。支へ

○右の事、おまかに程のお湯を取る。其の儀二合

の屋と申す。甲子入の御法事。九牛大井船と申す。△又あさぎ

○事、義理あ傷合之十萬是小魚也と、東方不審の心納  
うふやくも。御の體とおふ。西石守へ水界無事。乞  
く十萬はえほり。を掛。乞て軍政の事く。水は十  
万は不入。小割取。之面半丈丈七。もとよりに。先寫  
がな。水は全も。乞う。不善。水石守へ。水は十丈と並  
り。

君は當時貯蓄を多めに持つてゐる。今度は、金額は五万  
銀圓である。余は未だに洋服を購入する機会が  
なく、洋服を買ひては、未だの程度である。金額は二千  
円である。洋服は、腰帶、上衣、下衣、手袋等の付属品  
と、洋服の合計で八百円である。この外の入と出で一ヶ月  
かゝり、百圓の支拂ふ。十九年九月三十日、金子

八食石とえのへ、東安石の内と門脚立石と手を外せ合  
れたり。お是處ふては、九十九と、  
まことに金銀をかき集めの合

○かみぬさんと云ひの、慶助記をしもひくもえくと人  
あす。覺き、事にありて、圓平少く八事見一と金りの金銀  
百目十六の割とをよ出と。但へ、八事の二とへうて、一段除  
てもハと二とよで、もとも同じ。おは見一の事の、そんたの  
割とをとて、併へるく小切て、うち、くと相違て、もん二の際す。

二と五と六と七とは、九十九と、まことに、手を外せ合  
だら通じて見る。

百目と無

二の度

とまで二の手引、百目と無、二の度一とまで一八の手引二種

又八の度

とまで二八手引

二と五と六と七とは、九十九と、まことに、手を外せ合

二と五と六と七とは、九十九と、まことに、手を外せ合

二と五と六と七とは、九十九と、まことに、手を外せ合

二と五と六と七とは、九十九と、まことに、手を外せ合

二と五と六と七とは、九十九と、まことに、手を外せ合

見

百目と無、二の度とまで二の手引、百目と無、二の度一とまで一八の手引二種

とまで二八手引

「トミーの六」は  
40の割りあがれ

六十六年九月廿三

二と三一と四合一二の二

法  
二六十二  
八  
卷  
三

わざとそぞくして、とうふ會一派の火打

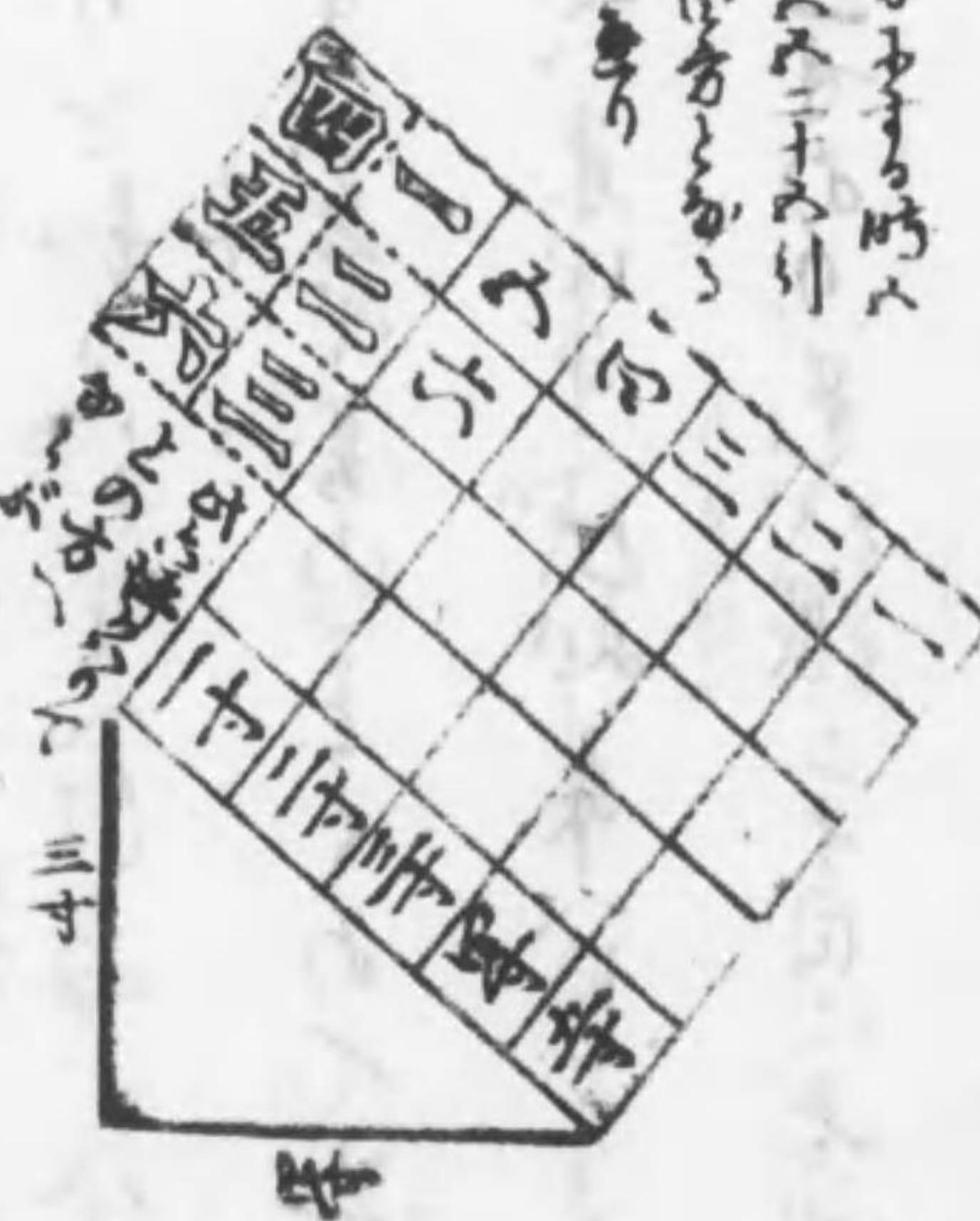
清江

まろく

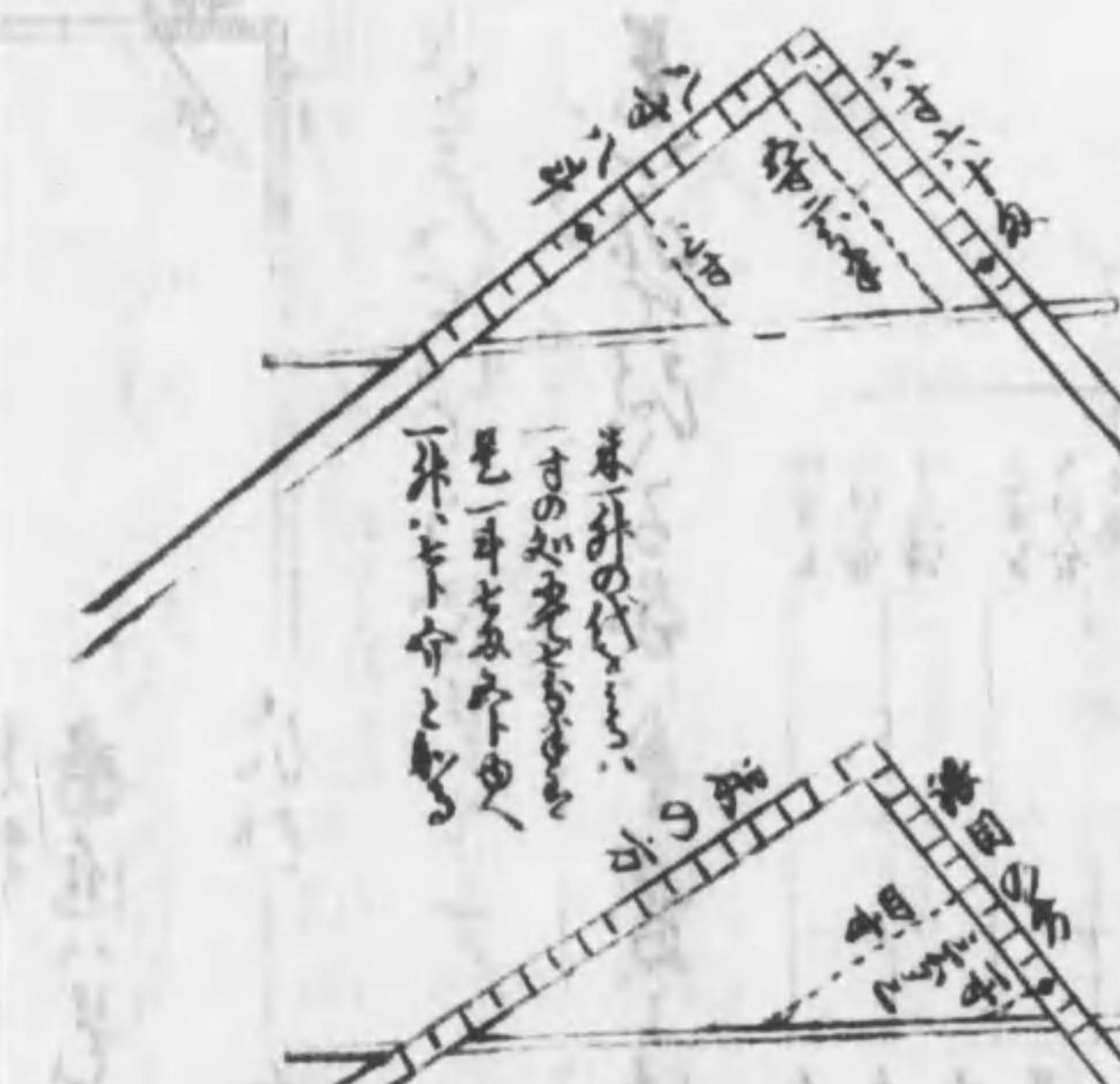
はくのまへ  
おもひて  
ゆきとよ  
めぐらす  
うきよ

南過八荒之國  
北窮無窮之山  
東窮溟涬之海  
西窮西海之隅

うそと、ひるがえりの處をかみよ他よりゆく  
ふとももあらまへ



まわりあひたる相陽のあらと都  
船かくふと十日すと八津八すとまの  
うて。等の



はくじにあまはすとも是もあくまでもお説く  
き氣のゆきる、まよの如十兵の傳  
と伝ふ下し、かほりをども、せんの間りと細ふか  
ほとあるのばかり

まうりぐもを二。険三。険あら割某。セシトアモ。先手ふ  
もち引され。ササヒタマアモ。又右ノソモアモ。引めテ  
たの方一寸の処也。左の方一寸半あれば、二の険の割也。  
守をもとをもすか。左ノソモアモ。二の険の割。板左の二  
ととまでもうねふきし。筋と長く。通。左東三百五十二  
ツ小刻。左の守の如く。左ノソモアモ。一。右ノソモアモ。百  
半刻。右の守の如く。右ノソモアモ。一。右ノソモアモ。百  
二。すみに。右の如く。右ノソモアモ。一。右ノソモアモ。百  
八の如く。左ノソモアモ。一。右ノソモアモ。一。右ノソモアモ  
八小刻。左ノソモアモ。右ノソモアモ。左ノソモアモ。右ノソモアモ。  
米六升とハ。よそく。行程と。右ノソモアモ。左ノソモアモ。右ノソモアモ。  
知れ。左ノソモアモ。右ノソモアモ。是軍八升。一。右ノソモアモ。

す。をくわす。もとあす。まゆる。まゆる。刻の立。す。か  
経。よし。ふもつけ。よと。まべ。二の腰。の腰。との仕方。右  
手。か。そ。か。だ。と。見。一の刻。た。か。先。す。と。左。  
刻。立。は。ふ。二。層。と。毛。毛。せ。ん。の。ま。ま。立。し。と。左。右  
を。人。と。左。右。守。と。ま。と。に。ゆ。そ。ま。と。の。す。と。ま。ま。か。ひ  
長。く。い。き。毛。根。は。ま。と。ま。か。刻。か。し。た。守。の。え。ば。右  
手。に。じ。り。て。ま。れ。守。と。ま。と。毛。二。ト。ぐ。り。と。又。末。二。十。六。石。は  
ま。と。ま。と。の。種。と。ま。ば。右。と。守。と。ま。と。ま。と。ま。と。ま。と

え。守。と。ま。と。毛。六。百。石。と。見。一。の。刻。ハ。面。目。は。刻。見。そ。  
ま。ま。は。也。人。の。左。を。ゆ。る。す。せ。て。ま。と。行。あ。と。ゆ。る。伝。か。り。酒。り  
油。五。物。切。割。薪。材。木。仰。下。自。生。み。ま。く。一

○。穿。一。わ。は。穿。る。時。墨。の。紙。と。ま。と。し。け。一。ね。ハ。行。者。と。行。  
十。行。隨。意。小。曲。人。と。用。べ。一。あ。と。へ。は。道。城。を。う。そ。九。行。ふ。お。ん  
や。と。ほ。の。方。を。す。ゆ。あ。け。し。か。と。一。行。の。路。と。せ。い。ま。先。お。目  
と。宣。す。こ。も。り。ゆ。ん。毛。は。の。じ。ゆ。と。一。行。の。路。と。せ。い。ま。先。お。目  
バ。ふ。も。ア。ゆ。一。行。の。路。と。せ。い。ゆ。と。九。行。ふ。お。ん

もとよりふくよかにすまへ。ふきよけふきよけふきよけ  
さわらひ。さわらひ。さわらひ。さわらひ。さわらひ。  
さわらひ。さわらひ。さわらひ。さわらひ。さわらひ。



左の刻。諸國の事紙。本居宣長。墨。右  
は、うり。右は、宣長。左は、角の鴻水斜  
井。

卷之三



二  
水  
火  
下



たゞ、又一  
事、不意に  
おもふ

まくわの刻小角、ままでむちに  
こ圓鏡の刻の  
ひのとくもじ全



一すづのひを年よりとおりへ  
あらまちと引きをあり

○利足の割附

見と細きして懷中より金銀  
貸附を取入を量あり

十二年を分より

十二年を分よりハ十二年二と  
二十あるをもぞ

十二年を分よりハ十二年二と

三十日をもぞ

三十日をもぞ

三十日をもぞ

三十日をもぞ

三十日をもぞ

三十日をもぞ

利もちト

捨みあるをも

日折

せあるをも

日折

二十あるをも

日折

日折

日折

日折

日折

日折

日折

日折

日折

卅年を分

日折

日折

日折

日折

日折

日折

日折

日折

日折

六十あるをも

日折

日折

日折

日折

日折

日折

日折

日折

日折

利足の義ハ三歳ふやしとも割附減事あへ。但自金の仕方と  
化を以てかの負の利ハ年約割ふゆるとかハニトウムと

二篇をさう。け二、十篇をもそとほふまの刊。一本稿  
印文へ二割ふりる。け一とある。

○勧一事

纂勧とて纂をうりとて、行西の事あし。勧の勧と別稿  
まべ。慶勧記ゆくらるもとて、なほ、書名も。又、あは筆  
とする勧動く  い通の本の上の角より下の角へ運  
きとて、ます人へ纂のよよいにんとて、もじもくとて、運うる。  
うそえとすとすとと。うわうわねよの、曲尺と入る。

勧



木のあるとやど。とくせば、さき下の隅と

さくさくせば、ぬるをもじる勧

○九百九十九羽の鳥、九百九十九浦を出て、一羽うなぎ九十九浦づ

ぬじうの程と高、若九十九かく者万〇〇二千九百九十九浦。

鳥小浦と余九十九万八千〇〇一羽も、うりとてか

○長物、ほきを拿す。皆内法、小粒一も入。を外多種種を全

ある。城内、長て、字九勢、百字、字あが峯

横壁自半十八坪、ふきとつけた、屏風半坪と外の波

六百八二七小割。六石九斗半升計合六斗八升

但 朱のまと目安する時五博の割合の半とえを算の次うけの屋敷  
又外見は食少も時外く多めの屋とえ方十万と云うと云う

○深下と多へ百枚半室 但 三丁半方 布半切と絹半切と絹主て届せらるぬ。

綾のうけをさし差へますを。つばしろみりんと計の所を

面と間並在す切を朱六千二枚。代役八文づの割を代金  
と間 長百四萬方里と百軍六役と青寄八分室

代金六十文あ者半支とえよりと毛織テ首丈八  
萬丈宣と毛 十丁の住と見

室の一折十枚六町と家に毛丈町とあもる本の

折下十弓の 住と差へ 六十間と家廿七万石と 俗す毛丈年何弓ある

十六房二千丈と但 一折十丈の住と見 二丈八尺室

青寄四家と屋代のり一丈と丈十丈更丈と丈

前半切の半と人

紙敷百軍半至方の縦糞を。六斗六升除。青寄半丈

七束九十束と毛すハシスリン十枚の一折と  
と一枚とす。サハ朱ふ緋と在紙敷へせひえと家。草半

武メニ首六指四丈。但一目とだして布と通か。紙の

うたへ九寸六分足して一枚とて一あふせりへ。

をまきざしの代二ト買ひ毛門に仕事  
一本の一枚十  
二十枚又と半手一枚も割一枚の紙牌一分九リニ一毛。毛門  
又紙の、アサキタニキラモ金才木もあ割紙青守ハ少ニリニ一毛  
シホヤウ。故のアサキタニキラモ紙の合ハニテ等多モアリ  
ナリ。あお出でるますハモアリ。ナリ。紙青守青守ハ等多の代  
ヒタケミ。二毛四リニ毛ハ八八よて候毛にしがく。紙  
サヘ

もあ、覚て用な。懸けら際費を  
ほんと貰ひたるままで。は頬つり合ひの仕事と爲  
て、着着の如きを出せば、内に仕事と黙々と仕る  
も、一也城の築二年と半

馬公之子也。先王之元也。故曰馬。  
美八十八万之多者也。豈不重乎？

高百萬万石を取  
但免之ともお蔵前  
三十九万七千石  
免と號て其作山姓  
免と號て其作山姓

とくひよと繫は。百万石とをば、やまとをとて百万石あれば。  
萬石の一杯ゆがふもとの位、あまみ。年々万石あり  
八幕熱まく、幕常東熱の角毎日打たれ。先一月  
もつづけ。急山々し、もきき着ゆく。とおと多負じて連居  
ちか今を刻付はります。一いえ今もあひ當連居

十二萬之多。每百六十石，在每年八升九合。及  
一石小斛，則一石多至一百石。每石九升外，四合之內。

卷之二  
白金全之序

六子而罕異。之升東方，自七岁而

自古有志者事竟成  
外公七十二撮金

毛氏  
九  
中四卦  
卦内一爻之耀八主一案四七之  
同松鹿十二方之承而兼之  
并外合全之

二三小刻  
上海中華書局影印

是之謂也。故曰：「二端」。

子。廿八年八月上谷。○八擣一圭。

西漢書卷之三  
漢書卷之三

二和。一拜。余今人。公。家。之。櫛。本。主。九。乙。八。

中間外。引少。七擲。一索之二。七八。三

九以金  
百十三萬兩一百零七錢六分八厘

八旬九十五年八月十八日  
八時八分八合

家計甚以利也。予之二面快事在平生。余之  
谷

大  
抵  
於  
之  
子  
六  
百  
十  
石  
也  
中  
九  
石  
并

七  
卷之三  
七  
卷之三

二  
宣白里七號九十九  
西元一千九百零六年一月

問道錄

十二岁从军  
十四岁立功  
十五岁封侯  
十六岁为将  
十七岁破敌  
十八岁成名

二  
小  
刻

六一七二八三九四

三

12  
小刻

卷之二十九 八十六

卷之二

卷之二

之父也。其子曰二郎。

文選卷一七

八  
丁  
客

之七八九全爲一卷

卷之八

卷之三

卷之三

卷之三

七  
子  
劍

卷之九

卷之八

九小割  
一合三〇九分二厘

卷之三

卷之三

文政五年壬午仲春原地  
安政四年丁巳仲冬再刻

江戸書物問屋

和泉屋

和泉屋金右衛門

終